Rokko Catholic Church Bulletin

カトリック六甲教会 教会報

2013
11
No.503

明日の教会に向かって

主任司祭　松村　信也

紅葉の秋、赤や黄色に染まった六甲山系をドライブすると、自然の美しさとその不思議に直面させられます。あの素晴らしい赤く染まったもみじや真黄色の銀杏の木、そんな美しい光景が、猛暑の夏に起因しているとは疑いたくなります。厳しさがあって、この素晴らしさが見られます。嘘のようなこの現実の中で、爽やかな風に頬を撫でられるとき、生かされていることの喜びと同時に、明日への希望を湧き立たされます。その希望を具現化するために、「どうすれば良いか」しっかりと現実を受け入れながら、前向きに歩むのが「今でしょ」。

さて信徒使徒職、信徒の教会と言われて早、五十年が経とうとしています。ところが現実はどうでしょうか。どの教会も“司祭が不足しているから・・”、“司祭が高齢化したから・・・”といった本来積極的な信徒使徒職、信徒の教会であったはずが、「仕方がない」という消極的な信徒使徒職に変わり、信徒の教会になろうとしていないだろうか。

先月やっと出版された「第二バチカン公会議公文書・改訂公式訳」、もう一度、公会議の精神の理解を深め、初心に戻ってということなのでしょうか・・・・。

1965 年に閉会した第二バチカン公会議は、多方面にわたり社会に開かれた教会の刷新がありました。そのための推進運動もたくさん全国で行われました。しかし、いずれも十分に果たされないまま、忘れ去られてしまったのです。何が原因であったのか？どうして継続することができなかったのか。忘れられた種々の運動は、その理由を明かされないまま消滅していった。三十年前、まだ運動が活発に行われていた頃、信徒使徒職について論評したことを改めて思い起こしてみました。

「信徒だけで使徒職を遂行することは容易ではありません。したがって必ず、互いの養成が必要になりますが、過重な負担を課すことなく、丁寧な養成を心掛けなければならない事。そのためには① 養成側の信徒に対する十分な理解。② 養成は信徒の霊的生活も大切にする。③ 信徒使徒職に必要な基礎的育成。④ バランスのとれた人間関係の育成。⑤ 知的養成だけでなく『見、判断、行動』できる養成と調和と均整のとれた人間性の養成。⑥ 個人のための養成ではなく、神の民の一員としてキリストの肢体としての養成、などを大切にしなければならないと言われていました。なぜなら『信徒によらなければ、教会が地の塩となり得ない場所と環境において、教

会を存続させ活動的なものにすることが、特に信徒に与えられた使命なのである』(教会憲章 33 項)」からなのです。ところが三十年経った今、気づかされるのは；① 司祭主導・聖職者中心主義　② 指導者層の西欧志向（指導·養成レベルの問題）③ 司牧上の諸構造の均等化　④ 場当たり主義、これらは信徒の養成留意点に弊害をもたらしていたのではないのでしょうか。

司祭、信徒双方ともに痛みを分かち合いながら構造改革、刷新運動を推進してこそ信徒使徒職が可能になり信徒の教会が生じるのです。つまり、目標とする質的変化を生じさせるためには、大自然のように痛み苦しみを伴ってこそ、より美しく豊かなものが生まれてくるのではないでしょうか。

信徒の養成は先ず、「楽しくあるべき、誰にでもよくわかる指導をするべき、学んだことを互いに確認できる」指導を心がけるべきでしょう。さあ、明日の教会に向かって勇気を持って前進しましょう。明日という字は「明るい特別な日」なんです。私たちに与えられる特別な日の為に、喜んで奉仕できるよう互いに楽しく信徒の教会作りに参画しましょう。

新シリーズ

「何でも知っとこ」(8)

「日本の殉教者」

一般に「殉教」と言うと何故かイコール・キリスト教を思い浮かべる人が多いと思います。しかし、殉教と言う言葉は、キリスト教以外の宗教でも使われています。宗教的迫害において人の命を奪われた場合や、棄教を強制され、其れに応じないで死を選ぶ場合など様々な形の殉教があります。また異質なところでは、イスラム過激派の自爆テロの人を、彼らは殉教者と呼んでいます。いずれの場合にせよ、殉教とは「自らの信仰のために命を失ったと見なされる死のこと」を言います。

ではキリスト教で言うところの殉教の意味ですが、語源はギリシャ語で“μάρτυρια”“Martirya”といい、「証人（あかしびと）・証言・証拠」という意味から来ています。つまり、殉教とみなされるには、その死が「①その人の信仰を証していると同時に、②人々の信仰を呼び起こすものであるかどうか」という二つのことが基準とされます。

ちなみにキリスト教の最初の殉教者は、新約聖書に登場する、ステファノと使徒ヤコブです。洗礼者ヨハネも殉教者と言われていますが、伝統的にはイエス・キリストの死以降のステファノが「最初の殉教者」です。勿論、イエスの使徒と呼ばれた弟子たちは、ヨハネを除く全ての弟子が殉教したと言われています。

さて、場所を日本に移して殉教を考えてみましょう。我が国で殉教者といいますと、とかくキリシタンの代名詞のように思われますが、どうしてキリスト教だけが目立つのでしょうか。それは日本の歴史から推測できると思います。なぜ我が国でキリスト教の信者が殉教に遭わなければならなかったのか。その理由を調べていくと、すぐにキリスト教が日本に伝えられた時代へ大きく影響したことに気付かされます。

1467 年から 77 年まで 11 年間も続いた応仁の乱。将軍の後継者争い、守護大名の家督争いが実力者の権力抗争に結びつき、11 年にも及ぶ大乱が勃発。この応仁の乱で京都は焦土とかし、幕府の権威は失墜。世は群雄（英雄たち）が割拠する戦国時代に突入した。1493 年、北条早雲が武力で伊豆を占領し「戦国時代」が本格的に幕を開けた。

（約 50 年後）1549 年 8 月 15 日、フランシスコ・サビエル一行は初めて日本の地・鹿児島に上陸した。注意すべき事は、其れより 7 年前、種子島に鉄砲を積んだ中国の舟が嵐のために漂着し、乗組員であったポルトガル人より大金をはたいて日本人が鉄砲２丁を購入した。鉄砲を購入した日本人は、その鉄砲をまねて我が国で初めて“火縄銃・種子島”の製造に成功した。勿論、これは戦に使うことを目的として製造した。　1553 年から 1564 年川中島の戦い（武田信玄＆上杉謙信)。1560 年桶狭間の戦い（織田信長＆今川義元)。1570 年姉川の戦い。1575 年長篠合戦。1590 年豊臣秀吉天下統一。1600 年関ヶ原の戦い。

1567 年、キリシタン大名として有名であった大友宗隣は（当時、豊後・肥後など九州 6 カ国の守護大名)、南蛮貿易に熱心であり、その目的は、大砲や火薬の原料となる硝石の輸入であった（イエズス会に熱い庇護を与えていることを述べ、毛利に硝石を売ることを止めさせる)。戦において銃だけでなく大砲を用いたのは宗隣が最初であると伝えられている。1576 年に洗礼をうけた宗隣は、次第に信仰の人となっていく。当時戦の中にあって貧しい人々、けがを負った人々、親兄弟を亡くした子どもたちに町は溢れていたと伝えられる。そこにキリスト教は、宣教師たちを中心に慈善事業を興していた。次第にキリスト教を信奉する人々が増えた。（＊1587 年バテレン追放令。宣教師に 20 日以内の国外退去。）キリシタンをよく思わない大名たちにとって、あまりおもしろくないことであったが、武器や近代技術のために南蛮貿易を進めた。ところが＊1596 年スペインのフェリペ号事件が勃発（スペインが布教を植民地の拡大のため利用している疑念を広げた)。南蛮貿易に危機を感じた当時の将軍豊臣秀吉は、植民地化されることに危機感を持ちキリスト教禁止令を出した。そして、石田三成にキリシタン逮捕と処刑を命じた。ここに長崎でキリシタン 26 人が殉教することとなった。秀吉は朝鮮出兵に失敗し、その後政権崩壊へと繋がる。1598 年豊臣秀吉が病死した後、これに変わって徳川家康の時代となった。家康は初めの頃、キリスト教を黙認していたが、1612 年禁止令発布し、全国に広がっていたキリスト教信者を迫害した。(1639 年鎖国)

日本での殉教者は、個々の教義や態度が問題にされるのではなく、キリスト教徒であること自体が罪とされたのです。つまり、キリスト教徒として捕らえられた者は、キリスト教を棄てれば許されたと言うことです。しかし、棄教を拒んだ人は例外なく死刑になり、しばしば拷問の末に残酷な処刑方法で殺されたのです。16 世紀から 17 世紀にかけて沢山の外国人宣教師をはじめ、日本人信者が己の命と引き換えに自らの信仰を守り通したのです。

主任司祭　松村　信也

忘れないで！

ー東日本の被災地からー

「殻には放射線有り」でも、「油には無し！」（油脂植物）

マリアの宣教者フランシスコ修道会
原町修道院　シスター小沢

9 月 22 日に NHK が放映したテレビ番組「復興サポート：放射能汚染からの農業再生」をみて、とても

感動しました。菜種やヒマワリの種を調べると、殻に放射線がついていても、油には無いというのです。南相馬の復興サポーター・河田昌東（かわだまさはる）先生は、分子生物学者で、チェルノブイリの原発事故の後、ウクライナの汚染区域の農作物栽培を支援してこられた方で、農作物を安心して栽培し、食べられるように支援しておられるそうです。菜種、大豆、ヒマワリの種にはセシウムがあっても、油には移行しないので、きれいな油が取り出せると言うことでした。人々は「神さまからの贈り物」と呼んでいるそうです。驚きました。殻にセシウムがあったら、その段階であきらめてしまいそうですが、油を絞るところまでして安全を確認すると言うのがすごいと思いました。

河田先生のご指導で、菜種の研究をしておられる有機農家の杉内清繁さんによれば、菜種は生のまま絞る　→　・コーヒーフィルターで 2 度濾過する。

・不純物を取り去るため、濾紙を 3 枚重ねにする。

・そうすると、汚染のない透き通った油がとれる。

・セシウムを含んだ油粕は発酵させ、バイオメタンガスを発生させて、燃料として使用。残渣（ざんさ）は低レベル放射性廃棄物として処理。

農業高校の男の子は南相馬名物の「しみもち」を菜種油で揚げたものを試食して、「油がさっぱりしていておいしい」と言い、人々は「まろやかで昔の味がする」と仰っていました。昔は南相馬ではどこの家でも菜の花を栽培して菜種をとり、「油しめ屋」さんでしめてもらって、自家製の油を使っていたのに、いつの間にか「油しめ屋」さんが街の中から姿を消してしまったと言います。菜種油の天ぷらは最高においしいのだそうです。菜の花の次にヒマワリを植えて輪作もできると言います。3 年間水田を作れなかった南相馬にも新しい希望が出てきた、と感じました。

二本松の農園は既に油を商品化しているというので、私たちは「270 グラムで 1500 円」という大豆油を注文しました。一般の商品よりも割高な感じですが、これで復興支援ができればと願っています。

河田先生は「正しい事実をきちんと知り、自分にとって不利なことも受けとめる力をもってこそ、困難を打開できる」とおっしゃっていました。聖書にもあるように「希望はあざむかない」（ロマ５：５）。あきらめないで可能性を追求していけば、不可能にみえる汚染地域での農業再生も実現しそうだと、感じることができました。支援していきたいし、皆さまにもご理解とご協力をお願いしたいです

＊油にされるのかどうかは分かりませんが、一面の菜の花畑、ひまわり畑を南相馬で見ました

菜の花畑

ひまわり畑

雨宮神父 聖書公開講座

９月２１日、２２日の二日間雨宮神父様の聖書講座が開かれました。

今年から宣教部が主催することになり、神戸市内の小教区にも広くお知らせしたこともあって沢山の方が来られました。

今年の夏は猛暑、豪雨と「荒ぶる」天候が続いたうえに、日本社会も落ち着きがない中、講座の時間では雨宮神父様の聖書のお話が、聖堂の静かで落ち着いた雰囲気の中で、心に沁みこみました。来年も聖書講座を行いますのでとくに六甲教会の皆様のご来場を期待いたします。

（宣教部コーデイネーター　佐久間 ）

恒例となった雨宮神父の公開講座『みことばに聞く』が９月２１日と２２日に行われ，今年は両日とも約１００人ずつの参加を得て，静かなうちにも熱心な講演に聞き入りました。今年は創世記１章から３章の天地創造と最初の罪についてのお話でした。

１日目は創世記１章～２章４節前半の創造物語と，２章４節後半からの創造物語の２つについて，“神”の呼び方をはじめ，表現と内容の違いにみられる別の物語を敢えて併記していること。

神の創造への賛美に続き，混沌と深淵，水といった信仰の闇･虚無感に対して「光」をもたらした人間に希望を与える光を表すなど，みことば（神）によって創造が行われ，人へのメッセージを示していることがわかります。また８つの被造物の創造の業を６日間の作業に無理に入れ込んでいます。

「人の創造」には，他の被造物の時の命令形ではなく，神はためらいながら人を造られた表現（我々は人を造ろう）になっていることから，「人は何か」そしてそれは神の人への思い（常に神と対話するのが人の道）を示していることが創造物語の主眼と考えることができます。

２日目の創世記３章は，原罪とその結果についての解説がありました。蛇の女への誘惑の仕組み，神からの支持が女のうちでどのように変質して思考をたどっていくのか，「神の大きな恵み」が女の内から消え，関心が園の中心の木に向かい，神の言葉が束縛で不満不信となり，神が言ってもいない「触れてもいけない」と思い込むことで，蛇に付け入る隙を与えたのです。そして食べます。その蛇は自分の外で無く，自分の内に住んでいるのでしょうか。そしてそのあとの８～２３節では，神による尋問と刑の宣告，刑の執行と続いていきます。

キリスト教のいう罪（原罪）とは自分の力に依り頼み，「神との一致の関係を破る」ことです。「ファリサイ派」のように自分は正しいと自惚れることです。

創世記の「関心」は，被造物に「みことば」が見られることにあり，万物は偶然の産物ではなく，神の意志を，「絶望からの解放」を表す信仰宣言にあります。詩編１０３にあるような「憐み深く　恵みに富み　忍耐強く　慈しみは大きい」主を。以上簡単に講話をまとめてみました。不十分ではありますがお許し下さい。また来年も雨宮神父さまの聖書講座は続きます。次回を楽しみに待ちたいと思います。

（飯塚）

講座２日目の参加者は８０名程度でした。２日目は創世記第３章、最初の罪（原罪）と楽園からの追放に関するお話でした。神父様は「知識の木から食べてはならない。」と命じられた神の御言葉と、「女」（エバ）の言葉、蛇の言葉の微妙な差異を分析され、通常、人間の外にいると考えられる蛇は実は「神の指示は人を束縛するものでしかない」という人間の内なる考えであること、原罪の結果破綻したかに見える神と人間との生命的な関係は、その後、神の憐れみの受け皿となって行くことを、原典の逐語的な考察により示して下さいました。ともすれば神と人間の関係の破綻の始まりと捉えがちな原罪の物語を、救いの歴史の出発点として読み直すことで、神様の憐れみにまたひとつ気づかされた講演でした。

（　荏原　）

カトリック六甲教会宣教部主催　２０１３秋の黙想会
「旧約聖書にみる信仰に生きた人たち」

☆日　時：１１月２３日（土・勤労感謝の日）１０：００～１６：００
（１５：００～教会聖堂でミサ）
☆場　所：六甲学院生徒研修所（六甲教会より北上１６０ｍザビエル・ハウス敷地内）
☆指　導：赤松広政神父
☆会　費：無　　料
☆対　象：どなたでも
※ 昼食：各自持参（温かいお茶は用意します）
※ お問い合わせはカトリック六甲教会事務局（℡０７８－８５１－２８４６）まで

オルガンメディテーション Vol.7 信仰年によせて を終えて

9月最後の主日のミサ後、京都ノートルダム女子大准教授・久野将健氏オルガン演奏によるオルガンメディテーションが行われました。
六甲教会所属信徒以外の方をお招きしてのオルガン独奏は、「オルガンお披露目感謝コンサート」で久保田清二・相愛大学名誉教授が演奏されて以来、約四年振りとなります。
久野氏はカトリック田園調布教会所属。グレゴリオ聖歌から現在の典礼聖歌まで教会音楽に詳しい教会オルガニストで、「マラナタ」で有名な、新垣壬敏氏の指揮される合唱伴奏者として活躍されていたこともあります。

優しいステンドグラスの光が差し込むひととき、カトリック信者として久野氏が、「信仰年によせて」というテーマのもと、選曲をしてくださった曲の数々を味わいました。
最初に演奏された曲は、サンピエトロ大聖堂オルガニストであった、フレスコバルディ作曲の「使徒のミサ」。キリエはあわれみの賛歌、聖体奉挙のElevationでは聖変化の場面のオルガン曲です。
まさにイタリアのミサに預かっているかのような、錯覚がおきました。

次の新垣壬敏作曲の「越天楽のテーマによる変容」はメロディが日本古来の旋律で、「唱歌・紀元節」に大変似ていて驚いた方もおられたことと思います。日本古楽器の笙の響きが心地よくオルガンで再現され、タイムスリップしたかのようです。

聖書朗読を挟んでのコラール作品では、オルガンの音を「みことば」に重ねて味わうことが出来ました。そして最後のバッハではまるで音浴にでも浸ったかのごとく、心地よく音に身を委ねることができ、オルガンからの豊かな響きが聖堂を包みました。聴衆の大きな拍手は、全てに対しての感謝であったと思います。

メディテーション最後の曲は信仰年テーマソングの「クレド・ドミネ」。全世界で様々な言語で歌われているこの曲を、久野氏の伴奏で合唱しました。当日参加された、教会内外の150名の会衆は聖歌で一つ

になりました。
教会外から参加された方からは、「初めてカトリック教会に来ましたが、オルガンの響きを聴きながら、こみ上げるものを感じました。これが祈りだったのかと感動しました。」との感想を、また久野氏からは、「温かい聴衆のみなさん、素晴らしい響きの聖堂、オルガンが一体になれた空気を感じましたまさに信仰の喜びです」とメッセージを頂きました。
六甲に設置している辻オルガンは年齢にすればもうすぐ45歳になります。これからも会衆を様々な場面で支えていってくれることでしょう。
次回のメディテーションは11月30日土曜日、待降節が始まる日の夕方17時より行います。音楽の中での瞑想、祈り、そして待降節へ誘い。みなさまのご参加をお待ちしております。

〔オルガンチーム　清水〕

六甲教会混声合唱団　歌訪問活動(10 月 2 日)

秋とは名ばかりの残暑厳しい 10 月 2 日、合唱団の方々にお越しいただきました。
春夏秋冬、それぞれの季節にちなんだ歌を歌っていただきました。時には輪唱に参加させていただき、利用者様もとても嬉しそうに生き生きとして楽しんでおられました。「ふるさと」を全員で歌った時は、普段なかなか言葉を発することが難しい利用者様が一緒になって歌う姿を見て、とても感動いたしました。「花が咲く」では、東北の震災復興の歌であるということを知っていた方も知らなかった方も皆様感動され、アンコールに応えていただきました。
最高齢の利用者様は昨年合唱団の方々が来られたことを覚えておられ、はじめは「来年はもういません。」とおっしゃっていましたが、最後には「来年も来てください。待っています。」と力強く合唱団の方々に声を掛けておられました。皆様が来られることが励みになっているのだと強く感じました。利用者様にとって、単に歌を聴くということのみならず、生きがいや励みや癒しとなっていることを感じ、合唱団の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。
来年もまた、是非いらして下さい。利用者様職員一同、心よりお待ち申し上げております。

（うみのほし魚崎デイサービスセンター　神谷　）

六甲教会混声合唱団 20 名余りが恒例のうみのほし魚崎デイサービスセンター利用者の方達への歌訪問をさせて頂きました。101 才の方がおしゃれをして待っていて下さいました。昔懐かしい四季の歌など歌

い始めると皆さん首を振り、一緒に歌い始められ、私達の方が胸の熱くなるのを感じました。
こうして歌訪問させて頂き、私達一人ひとりの心の中に頂くものの多いことを思い、感謝いたします。
これからも続けていきたいと改めて思いました。　　（六甲教会混声合唱団）

****

神戸バイブル・ハウス創立１０周年記念第６回聖書リレー朗読会に参加して

堤

山々では木々が赤や黄色に色づき始め、ようやく今年の夏の暑さから解放されて、静けさを感じられる日々が訪れております。

さて、神戸バイブル・ハウスでは、１０月２日（水）～１１日（金）すべての世代で読みつなぐーというテーマで、聖書リレー朗読会が開催されました。特に１０月５日（土）は、若者が聖書に親しみを覚えられるようにと、小学生以上の学生の方達が参加する枠とされたそうです。

私は１０月１０日（木）９時半から一人１５分という事で、夫婦で参加させていただきました。二人で少々緊張して３０分前には会場に着きましたが、六甲教会の方が受付して下さり、席に着きますと良く存じ上げた方がタイムキーパーとして座っておられ、朗読される方も同じ教会の方で、おかげさまで落ち着いた暖かい気持ちで参加させていただくことが出来ました。この聖書リレー朗読会は、１００時間かけて朝９時から夜９時迄、およそ延４００人の方によって、創世記からヨハネの黙示まで聖書が読み継がれて行きます。

私は、ヨハネの福音書１８章から１９章にかけて読ませていただきましたが、朗読を始めると、聖書の世界に引き込まれ、イエス様がお引き受けになった試練が心に響き、何処までも父である神様に信頼して、死刑の判決を受け十字架につけられた様子が改めて私の心に迫ってきました。

この聖書リレーを通して、多くの方々と共に聖書の御言葉の中から、新たな感動を得ることが出来て感謝しております。そして日々の生活の中で苦しい時つらい時に聖書を開くことで、神様からの希望を頂いて生きて行けるのではと思います。

この聖書リレー朗読会を準備して下さった、全ての方に心よりお礼申し上げます。

****

大西先生の「認知症をめぐって」の勉強会に参加して

10 月 27 日（日）10 時のミサ後、精神科医大西道生氏（当教会の信徒）の勉強会が行われた。内容は「認知症をめぐって」というテーマで、教会も高齢化が進んでいるせいかイグナチオホールは超満員だった。先生はスライドを使いながら、アルツハイマーや認知症の違い、予防方法。認知症に罹った人への関わり方など詳しく話された。

現在、日本では予備軍も含めると 65 歳以上の４人に１人が認知症になると言われているだけに、皆さんの関心も強く、１時間３０分にわたる講演中席を立つ人もなく、熱心に聞かれていた。講師の大西先生は終始ユーモアを交えながら話されたが、特に「教会の行事なども積極的に参加することが認知症予防の一つです。」と話されると、会場内は大爆笑となった。皆さん、元気なうちは教会行事にも積極的に参加しましょう。

（蛭田）

≪ 各 部 だ よ り ≫　各専門部会の活動をお知らせいたします

教会学校
11 月 9 日（土）と 23 日(土)お休み

三日月会
11 月 18 日(月)例会

地区会
11 月 16 日(土) 9：00 教会大掃除
地区役員会

宣教部
11 月 23 日（土）秋の黙想会

広報部
11 月 30 日（土）教会報印刷

＊＊

《 お知らせ 》教会のみなさまに知って頂きたい活動やお知らせです

★社会活動部より★

11 月 6 日（水） 10 時　♪手芸の集い　第 1・2 会議室　どなたでも参加ご自由です。
10 日（日） 9 時ミサ後　♪チャリティバザー
バザー当日出店希望の方は、社会活動部コーディネーター
小西までお申込み下さい。
17 日（日）10 時ミサ後　♪ふれあい広場　イグナチオホール
手作りコーナー　東北物産店
21 日（木）9 時　♪ベタニアの集い　イグナチオホール
聖体拝領式＆茶話会　奇数月第３木曜日開催
22 日（金） 9 時 30 分　♪ともしびケーキづくり　お台所
30 日（土）10 時　♪炊き出し　お台所（調理後、小野浜グラウンドに移動）
小野浜グランドでの配色
おじさんたちとのお話し相手だけでもＯＫです。

※ 11 月 9 日（土）はチャリティバザーの準備の為、炊き出しはお休みです。
第 5 週の 30 日（土）に変更になります。ご協力よろしくお願いします。

オルガンメディテーション

ー待降節を迎えてー

☆ 日　時：2013 年 11 月 30 日（土）17：00
☆ 会　場：カトリック六甲教会主聖堂
多くの方のご来場をお待ちしております。

《　図書室からのお知らせ　》　　図書室より

2013 年 10 月に入った図書から

☆平和憲法が平和の道、改憲は戦争の道　　――　西山俊彦 著

平和ボケであろうとも、「時すでに遅し」と後悔しないために、平和憲法の真価を見直す素養まで捨てるわけにはいかない。――大阪教区司祭による緊急出版――

☆祈りへの旅立ち ～マザーテレサに導かれて～　片柳 弘史 s. j. 著　（ドン・ボスコ社）

この本は主に、マザーテレサが残した言葉とそれに対する著者のコメントから成っている。祈り方がわからなくなったとき、この本は祈るための座標軸に私たちを戻してくれる。

著者自身がイエスと出会い，大学卒業後にインドに渡りマザーテレサと出会い、心の深いところに存在する神との関係を築いていく深い祈りの中で、司祭職へと召し出され叙階されてゆく。「わたしが司祭の道に呼ばれていることについて１度も迷いを感じたことはありません。」という著者の力強い言葉はとても印象的だ。本文は著者の体験に基づいて書かれた言葉が続いており、とても読みやすく心に響く。また、読み進めてゆく中で，あちこちに引用されているマザーテレサの言葉と出会う。「私の心の中におられるイエスよ、あなたの優しい愛を信じます。あなたを愛しています。」神とはどのような存在であるのか思いを巡らすが、マザーのこの言葉は私たちの救いの体験と強く結びつく。神が私たちを愛して下さっているのだという確信を表現している。

（注）現在、金曜日に聖パウロ書院で行われている片柳神父様のクラスは、この本をテキストに行われています。一つの章につき１週目は講話を聞き、一週間自分で祈り、翌週分かち合いをする、２週でワンセットのクラスです。テーマの助けとなる聖書のことばも頂き、暮らしの中で祈る習慣がつくでしょう。（佐藤 雅孝）

※ お願い　バザーでの古本市はしないのですか？との問い合わせにお答えして

一昨年からバザーでの古書の扱いを中止させていただいております。お持ちの不要になった図書の内で，他の方にもぜひ読んで頂きたいと思われるものについては，毎年春に神戸学生青年センターが行っている『古本市』にお持ちいただくのがよいとお勧めいたします。ここでの収益は外国人留学生への奨学金に利用されています。よろしくご協力をお願いいたします。

みんなの広場

諸聖人

ヨハネ　三好

１１月１日は「諸聖人の祭日」、２日は死者の日、３日は文化の日（明治節）。信徒で３日の「文化の日」を意識しない人は例外だろう。だが１日と２日はどうか。

１１月１日は「諸聖人の祭日」。嘗てこの日は「諸聖人の大祝日」とされ、殆ど平日になるこの日は主日と同じく守るべき日とされていた。今はどうなっているか知らないが、嘗て六甲中学校の創立記念日は財団法人認可の日でもなければ，開校の日でもない１１月１日であった。２日は「感恩感謝の日」としてこの日だけは全校生徒の前で死者のミサが捧げられていた。平日を休校にする口実だったが、１１月１日と２日はそれほど大切な日であった。

「聖人」とは何者か、普段は殆ど意識していないのではないか。いわゆる「聖人・君子」の聖人ではない。「聖人」とは、肉体の死後直ちに煉獄の潔めを経ることなく神の至福に与っている人々、あるいは死後煉獄の潔めを経て今は神の至福に与っている人々といえばよいのではないか。つまり我々は一人残らず「聖人」にならなければとんでもないことになると言える。バルバロ訳「毎日のミサ典書」にこんなことが書いてあった。「公教会が今日祝う知られざる聖人の中には、信仰のしるしをもって永遠の旅へと先立ったわれらの親戚知人もあるであろう。また、天のむくいをすでにうけているひとびとは、かつてこの世において、我等と変わらぬ生活をおくった人々である。聖アウグスティノの言葉をかりるまでもなく、かれらになしえた事なら、われらにも出来ないはずはないのである」。御託身、御受難、御死去、御復活はわたしたちを聖人にするためではなかったか。聖人は列福運動や列聖運動でなるものではない。

２日は「死者の日」。人間は肉体の死によって消滅するものではない。死者が神の至福に与れることを祈り願う日、煉獄の霊魂の償いを代わってする「全免償」を受けることが勧められた日でもあった。「恵み豊かな神よ、復活された御子キリストに従うわたしたちの信仰を強め、死者の復活を待つわたしたちの希望を不動のものとしてください。」（集会祈願）。ミサに与るときは必ず死者のために祈る。それがただの言葉として通り過ぎてはいないか。今は言われなくなっているが１１月は「死者の月」とされていた。普段意識することもないだろう生と死は分かち得ない一連であることを確と心に刻み込んでおこう。

「援助修道会」は「煉獄援助修道会」が正称で本旨ではなかったか。ブラウン神父は「煉獄」と略していた。人は皆アダムとエバの子孫、永遠に同じ家族の一人であることを改めて心に刻み込んでおこう。「聖徒の交わり」を。

教会報12月号の発行は、12月1日（日）です。
編集会議は11月24（日）です。
記事原稿は、11月17日（日）正午までに信徒会館受付へご提出願います。　（広報部）
http://www.rokko-catholic.jp

カトリック六甲教会
〒657-0061　神戸市灘区赤松町 3－1－21
電話　078－851－2846
発行責任者　松村信也
編集　広報部